

# 姫路支部だより

## Contents.

- 1 11月の活動報告  
12月の活動予定  
お知らせ
- 2 事業報告  
建築家講演会  
建築子供プログラム  
研修会 兵庫県立大学公開講座

## 6 姫路建築探訪

- 12 Topics  
「構造について考える時、私の思うこと」

## 11月の活動報告

- 11. 1 (日) 建築家講演会【詳細は別紙】
- 11.14 (土) 兵庫県立大学公開講座(兵庫県立大学)【詳細は別紙】
- 11.19 (木) 第8回建築相談(姫路市役所)
- 11.25 (水) 第7回環境デザイン研修会(姫路建設会館)【詳細は来月号】  
第3回理事会(姫路建設会館)
- 11.27 (金) 建築子供プログラム(勝原小学校)【詳細は別紙】

## 12月の活動予定 (終了分含む)

- 12. 6 (日) ものづくり体験講座(ものづくり体験館)
- 12.10 (木) ものづくり体験講座(ものづくり体験館)
- 12.16 (水) 第8回環境デザイン研修会(姫路建設会館)
- 12.22 (火) 支部忘年会(旬美魚町店)
- 12.24 (木) 第9回建築相談(姫路市役所)

## お知らせ

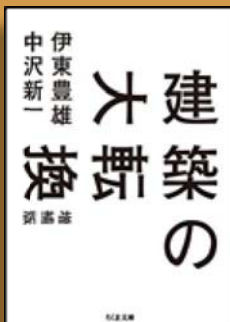
### ■今後の支部事業予定

青年部会研修見学旅行(2月頃)

支部親睦事業 グランドゴルフ大会(3月12日)

### ■書籍の紹介

・先日の伊東豊雄先生による建築家講演会に関する書籍などを紹介します。(山田)



①『建築の大転換』  
／伊東豊雄、中沢新一共著／筑摩書房／  
この度は、講演会に向けてこの本を読んだ勉強しました。



②『資本主義の終焉と歴史の危機』／水野和夫著／集英社新書(2014/3/14出版)

学生とのやりとりの中で、伊東先生が、これからの資本主義のあり方について勉強するなら、水野和夫さんの本を読めばいいと言われていました。

(2012/2/23 出版)

増補版(2015/10/10 出版)

# 平成 27 年度 姫路支部事業活動

## 建築家講演会報告

日時 平成 27 年 11 月 1 日 (日) 14 : 30 ~ 16 : 30 (14 : 00 開場)

場所 兵庫県立ものづくり大学校

参加者 146 名

姫路支部では著名な建築家を招いての講演会を定期的に行っています。今年度は非常にご多忙の中、東京から伊東豊雄氏を迎えての講演会となりました。

内容は「地方の時代、地方の建築」と題して日頃、伊東氏が取り組んでいる活動の話を中心に、建築に対する考え方を示していただけたように思います。また自身の作品である「みんなの森 ぎふメディアコスモス」の実例も紹介していただき、非常に有意義な時間を過ごすことが出来ました。講演会終了後は、サイン会にお付き合いいただき、また帰りの新幹線までのわずかな時間ではありましたが、懇親会にご参加いただき伊東氏を取り囲んで建築話しを楽しみました。



# 第17回 建築子供プログラム 勝原小学校

日程：平成27年11月27日(金)

場所：姫路市立 勝原小学校 (6年生3クラス114名を対象とする)

スケジュール 1クラス6班集体制 (1班 6~7名)

時間	6年生		
	1組(38名)	2組(38名)	3組(38名)
8:30 ~ 8:40	開会挨拶(校長先生・建築士会) 全体説明(工程説明・スタッフ紹介) 場所:体育館(10分)		
8:40 ~ 8:50	移動(10分)		
8:50 ~ 9:15	設計 (60分) ※班集体制	Q&A (25分)	モルタル作り体験 (60分) ※班集体制
9:15 ~ 9:25		移動(10分)	
9:25 ~ 9:50		パネル (25分)	
9:50 ~ 10:00	移動(10分)	移動(10分)	移動(10分)
10:00 ~ 10:25	モルタル作り体験 (60分) ※班集体制	設計 (60分) ※班集体制	パネル (25分)
10:25 ~ 10:35			移動(10分)
10:35 ~ 11:00			Q&A (25分)
11:00 ~ 11:10	移動(10分)	移動(10分)	移動(10分)
11:10 ~ 11:35	パネル (25分)	モルタル作り体験 (60分) ※班集体制	設計 (60分) ※班集体制
11:35 ~ 11:45	移動(10分)		
11:45 ~ 12:10	Q&A (25分)		
12:10 ~ 12:25	最終ブロックにて終了 生徒は各教室に戻る 建築士会スタッフは反省会【多目的室】		

12:25 ~ 12:45 建築士会スタッフ全員で片付け



開会挨拶



設計「私たちの夢の家を設計しよう」



パネル「建築職種説明と建築材料にふれよう」



Q&A「校舎を知ろう」



モルタル作り体験

何事にも諦めず面倒がらず積極的に人と関わってゆく大人の姿勢こそが人間関係の希薄さが問題視されている今、大切なことではないか。子供たちが大変興味深く熱心に取り組む姿を見るにつけ、大人からの働きかけと積み重ねていくことの重要性を感じます。

そして「建築子供プログラム」を体験した子供たちの中から建築家やあらゆる物づくりの職人になりたいと夢を抱き目標を持って歩んでくれることこそが、この活動の結実をみた時であると考え、これからも皆で創意工夫を忘れずに続けて行ければと思います。

# 事業報告 兵庫県建築士会姫路支部 平成 27 年度 研修企画Ⅱ

講座名：平成 27 年度 兵庫県立大学環境人間学部公開講座

『ヨーロッパの建築入門—新たな保存・開発手法』

講師：三田村 哲也 先生（兵庫県立大学環境人間学部・准教授）

内容：建築先進国では建築遺産に対する意識の向上、産業移転による空洞化対策を背景に、リノベーションやコンバージョンという既存建築を有効に活用する新たな事業が普及している。本講座ではその最新事例を紹介する。

日時：2015 年 11 月 14 日（土）13:00 ~ 16:30

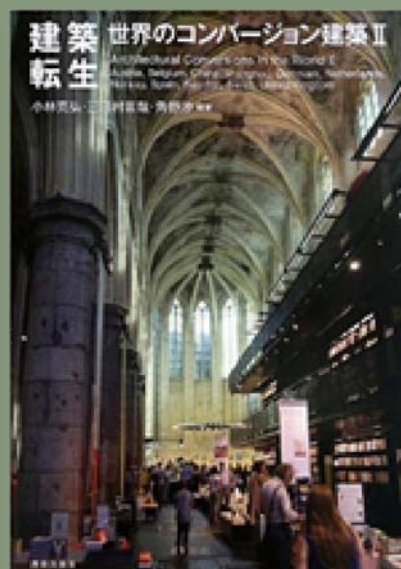
会場：兵庫県立大学環境人間キャンパス 講義棟（F棟）F 102

〒670-0092 姫路市新在家本町 1 丁目 1-12

受講料：1,000 円 / 参加者：約 25 名（内建築士会会員 10 名）



受講の様子



三田村先生 著書

（左）『世界のコンバージョン』 / 鹿島出版会

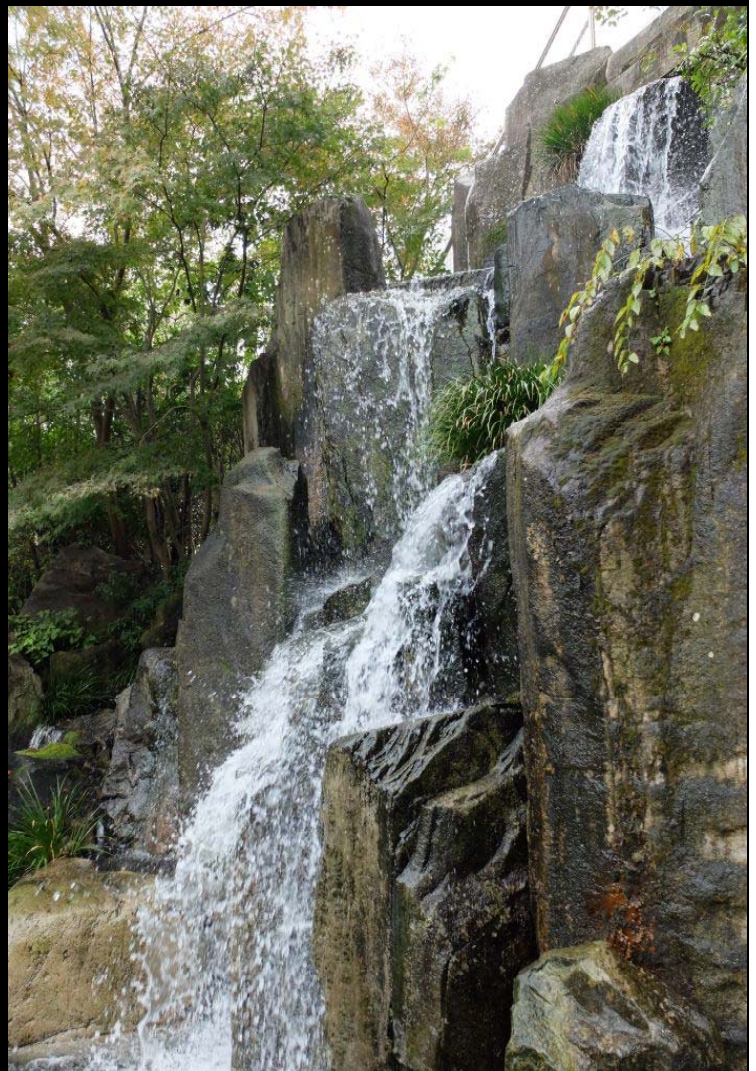
（右）『建築転生—世界のコンバージョンⅡ』 / 鹿島出版会





御座候あずきミュージアム

小豆をテーマとしたミュージアム。

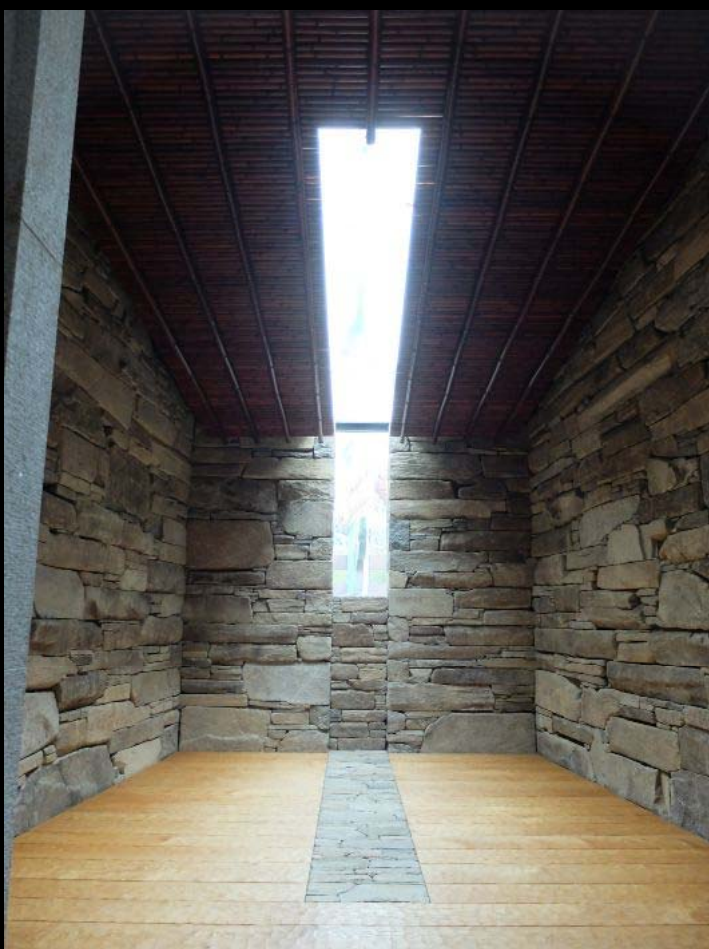


小豆のルーツとされている東アジアの照葉樹林をイメージした照葉樹の森と、池に囲まれひっそりと佇む建物。  
生野石を多用し、滝、せせらぎといろいろな表情を見せる。

外装のあずき色のレンガも周囲の緑に溶け込んでいる。

12角形の展示空間の中心には自然光がそそぎ、訪れる時間や天候により違った空気を感じることが出来る。

造園は好古園を手がけられた大北美松園の設計・施工。  
訪れた日は紅葉が美しく、静かで心が落ち着く空間です。



竣工 2009年5月  
 開館 2009年6月  
 設計 KAJIMA DESIGN (建築)  
 大北美松園 (造園)  
 構造 鉄筋コンクリート造  
 規模 地上2階 / 床面積 2,009.40㎡

姫路市阿保甲 611-1  
 開館時間 / 午前10時～午後5時 (入館は午後4時まで)  
 休館日 / 火曜日 年末年始と設備点検等の臨時休館  
 入館料 / 一般 1,200円、小中学生 600円

※内部写真については特別に許可をいただいて撮影しております。  
 通常は館内撮影不可となります。



建築年 1941年 竣工 設計 遠藤 新



写真1 南西より全景

京見会館は遠藤新の設計により姫路の西部、京見山の麓に昭和16年に新日鉄（現新日鉄住金）広畑製鉄所の迎賓施設として建てられました。



写真2 車寄せ / エントランス

遠藤新はフランクロイドライトが手がけた帝国ホテルの設計スタッフとしてライトを補佐し、建設費用が予算を大幅に超過して解雇されたライトの後を引き継ぎ、遠藤新をはじめ弟子が帝国ホテルを完成させました。

遠藤の有名な建築物としては1930年に完成したライト建築を色濃く残した「甲子園ホテル」や「旧山邑邸」がある。

甲子園ホテルは戦前は「東の帝国ホテル、西の甲子園ホテル」と並び称される超一流ホテルだった。





写真3 窓廻りのディテール



写真4 南東より

この建物は木造だが、旧山邑邸や甲子園ホテルを彷彿させるのびやかなシルエットになっています。(写真1)

また、水平に伸びた車寄せのあるエントランスはどことなくライト建築を思わせます。(写真2)

窓枠や柱は濃い赤茶色で塗られており、独特のこの色合いは遠藤が手がけた多くの住宅にも見られる特徴で、白壁との対比が美しい。(写真3.4)

この建物が建てられた昭和16年は、まさに戦時体制へ移行する時期で、大規模な建造物の新築が規制されており、軍事施設でもない贅沢な迎賓施設が建てられたのは国策企業であった日本製鉄(新日鉄)でなければ実現不可能だったでしょう。



姫路市都市景観重要建築物に指定

今回は、残念ながら中庭や内部を見学することはできませんでしたが、近々、改装の予定があるようで、完成時には、ぜひもう一度見学してみたいと思います。



名称：旧山本家住宅（きゅうやまもとけじゅうたく） 所在地：姫路市網干区興浜70

【構造規模】主屋：木造厨子2階建て 洋館：木造2階建て一部3階建て 和館離れ：木造平屋建て

（明治初期）

（大正3年～大正7年）

（大正3年～大正7年）



### 【建築の概要】

旧山本家住宅は伝統的な町家の建ち並ぶ網干興浜の町並みのなかにあつて異彩を放っている。土塀越しに見える3階建て、黒壁塗りの望楼風の塔は一際高く、よく見るとその外観が通常の和風ではなく、上げ下げ窓や鰐戸などの洋風の要素をミックスしたものであることが判る。それは白壁、厨子2階建ての主屋と並んで建っているだけになおさら強い印象を与える。この他、門塀が建物と一体的に造られ、奥には和室の離れ、また蔵なども接して建っている。平成元年7月1日 姫路市都市景観重要建築物等の第1号に指定。



### 【感想】

元主は、網干銀行頭取や町長も務めた網干近在きつての有力者として知られる。若くして家督を継ぎ、家業の呉服屋以外に事業を興し財をなされたようです。望楼風の塔は明治以来根強い人気があったようで、趣味というよりは、一種長者の象徴だったのかも知れません。昔はこの望楼から姫路城が見えたらしい・・・？

洋館の内部は、玄関ホール、客間、書斎、階段室が洋風意匠、他は和室で客間の意匠が特に手が込んでいました。また、2階の北側和室8畳の東面には、縦長の両開き窓が採用され外部に鰐戸が設けてあり自由な意匠である。和館離れの廊下天井にはスタンドガラスのトップライトが設けてあり、洗面室の壁には、『貝合わせ』に用いる貝を壁に埋め込まれていたり、廊下に面しスタンドガラスの窓が設けてある。浴室には大理石の浴槽など・・・大変興味深い建物でした。現在は撤去されていますが、さらにこの南側に15畳の大広間が続いていたそうです。

今のところ内部一般公開は行われてませんが、兵庫県ヘリテージマネージャー第13期養成講習会の実測調査演習に同行して見学させていただきました。本建物は、前主より姫路市へ寄贈されたようで、近々一般公開されるかも知れません・・・？（未定）



# 『構造について考える時、 私の思うこと』

景山 誠

西嶋支部長からこのテーマを頂いたとき、何を書こうかと色々と考えました。というのも、私は構造分野の実務経験がまだまだ浅いので「そんな自分が、『構造について』という大きなテーマで、建築士会の方向けに何が書けるのだろうか？」というのが正直な思いです。ですが、せっかく今回このような機会を頂いたわけですから、これまで自分が構造分野に携わってきて感じたこと、考えたこと、経験したことを振り返りながら、今現在、私の思うことを書いてみます。

## ■構造即意匠

そもそも私が建築分野に進んだのは、小さい頃の夢だった「大工になること」がきっかけでした。そういう思いがあったためか、自分の中で日本の民家や社寺建築といった木造建築に自然と興味をもつようになりました。木造建築といえば、よく言われるのが“構造即意匠”です。これは、柱や梁といった建物を支える構造部材があらわしになるので、そのまま意匠も兼ねることを言っており、木造建築が持つ大きな魅力の1つと言えます。私も、学生時代にいろいろな木造建築にふれていく中で、うっすらとですが構造分野に興味がでてきました。

## ■とっつきにくい「構造」

私が学生時代に構造関係の授業で最初に学んだのは「構造力学」です。「部材を線に置き換える」(何でそんなことができるの?)とか、力にも「曲げモーメント」、「せん断力」、「軸力」があること、また、「ピン」、「ローラー」、「固定端」、「ラ-

メン」(食べもの?)、から「断面2次モーメント」、「断面係数」、「断面2次半径」、「細長比」・・・などといった多くの専門用語がでてきて、何のことかよく分かりませんでした。特に断面2次モーメントのあたりからは、定義だけ言われてもよく分からないですしイメージもまったく沸かないですから、「意味はよく分らんけれど、とりあえずこういうものがあるんやな。」と割り切って覚えていったものも数多くありました。

それとは別に、「鋼構造」、「鉄筋コンクリート造」、といった構造種別ごとの授業もありましたし、地盤のことを学ぶ「土質力学」や建築で使われる材料を使った「材料実験」もありました。「材料実験」では、H形鋼や鉄筋コンクリートの梁を壊したり、鉄筋を引っ張ったりと、ものが壊れる様子が実際に見られたのはよかったです。

これらは全て構造分野の授業なのですが、それぞれがどこでどのようにつながっているのかが全く分からず、すごくとっつきにくかったことはよく覚えています。これらの関係性が分かり1つにつながったのは、社会に出てからでした。

## ■木造の授業がない

学生時代の後半には、木造建築に興味があったこと、分からないことが多くあったものの構造分野への興味が大きくなっていったことから、将来は構造分野に進んでいくのだろうと考えていました。ですので、学生時代の間に木造の構造分野のことを一度きちんと学びたいと思っていました。ですが、今はどうなっているか分かりませんが、私の学生時代には木造の授業がありませんでした。また、当時は木造の構造関係の研究もほとんどされておらず、この分野の研究が急速に進んだのは、阪神・淡路大震災以降でした。(余談ですが、

阪神・淡路大震災以降、壁量計算に4分割法やN値計算が採用され、また、木造住宅の構造計算でよりどころにされている「木造軸組構法住宅の許容応力度設計」(通称はグレー本。2008年版は新グレー本と呼ばれています)という本ができたもの、この時期の研究成果です。)私のこの時期は、木造の構造分野の研究が急速に進んでいる時でしたので、たまたまですが、木質構造の研究を精力的にされている先生の下で学ぶ機会を得ることができ、とても幸運でした。

在来構法の木造住宅に限定すれば、およその構造設計法は整備されているのではないのでしょうか。そうであれば、今後はその成果を建築関係の授業に取り入れる流れができればよいのではと個人的に思います。

## ■伝統構法について

一時期は、いわゆる伝統構法の設計法を確立するための取り組みが国家プロジェクトとしてなされていましたが、その成果がまとめられていないのが現状です。伝統構法については、多くのところで様々な議論がされていますので深くは触れません。ここでは、『在来構法と伝統構法の違いは』と聞かれた時に、自分ならどう答えるか?というので、私なりの考えを書いてみようと思います。

- ・在来構法：木材を金物や釘でつなぐ構法。
- ・伝統構法：木材同士を組み合わせる構法。

在来構法は、継手や仕口を金物でつないで接合することで架構を作っており、裏を返せば金物がなければ架構ができません。一方、伝統構法は、継手や仕口は木材同士を組み合わせることで架構を組み立てており、補助的に金物を使うことはあったとしてもその金物がなくても架構は成立します。そして、木材同士を組むための継手や仕口には様々な工夫がされています。一言で言えば、「(架構を成立させるために)金物は必須なのが在来構法、金物は不要なのが伝統構法」というのが、今の私の個人的な考えです。

一方で、伝統構法は、工学的に解明されていない点があるとはいえ(工学的に解明されていないから認められない、という考え方の賛否についてはここでは触れません。)、この構法で建てられた建築物が現存しているのは紛れもない事実であり、木を刻んで架構を組み上げるこの技術は、やはりすごいものなのだと思います。ですので、この構法がなくなってしまうことだけは避けてほしいということを切に思います。

## ■最後に

構造について私が考えることや思うことを書いてきましたが、個人的に思い入れのある木造の話に偏ってしまいました。裏を返せば、それだけ自分自身の中で、構造と木造の結びつきが強いのだということを感じました。

建物の構造性能は、地震や台風などの自然災害時には人命に直結する重要な項目です。私自身は構造設計者ではありませんが、構造に携わる者として今後より一層、技術力や知識の向上に努めていきたいです。



かげやま・まこと

姫路支部 理事

(株)兵庫確認検査機構